



日々好日は信心から

日々好日

六七四号

(令和七年四月発行)

暖かな春の日差しに誘われて屋外に出て、空を仰ぐと本堂の鬼瓦が目にとまりました。その鬼瓦には三つの円筒があります。これは経・律・論の三蔵を納める経筒だとされる。

仏の説かれた教えが経蔵、その教えを実践修行する者の生活規範を定めたものが律蔵、経典を優れた智慧によって解説したものが論蔵。

国民は物価高に喘いでいるとはいえ世界の国々に比しても貧困国とはいえません。それでいて社会は病んでいるようにみえます。それは煩惱の赴くままに生きている者の多さを教えています。

人間の身体には自然治癒力があるように、煩惱具足の身と云いながら佛の徳(佛性)が備っていると教わります。病んだ社会を健康体に戻すには十善戒という薬を服して佛性具足の身であることに気付く必要があります。積尊誕生の偈、「天上天下唯我独尊」というのは此の事を教えているのだと言えよう。積尊誕生の花祭りを佛性開花の健全な社会の中で営むことが出来るのは何時のことであろうか。鬼瓦を見上げての思いである。

弘法大師のお言葉

「佛戒は身をうるおし人多く益を得ること、甘露を飲んで纏痾を蠲療するが如し」(十住心論卷第二)
纏痾…宿病。 蠲療…病を療す。

「三業の雑穢を淨め、心身の熱悩を除き、一切の功德を成長すること戒に過ぎるはなし」(梵網經開題)



弘法
非遥

心中
即近

真如
非外

棄身
何求

日々好日

学院卒業の挨拶に伺うと、師僧は「吉岡君、君は下山せずしばらく三宝院を手伝ってくれ」と。

それは、寺の執事をつとめていた三十代の法兄が郷里の自坊に帰えられるのでそのあとをやってくれということだったのでした。

たった一年、学院で学んだだけの真言宗の僧侶としては幼稚園児にも等しい若僧に担える役割ではありません。愚鈍なる者でもそのくらいのこととは判断できません。

執事は旅館の番頭であり、お寺の住職代理のような立場でもあります。加えるにその屋台骨の大きさは責任の重さでもあります。



師僧はそんなことは承知の上のことであることは理解するものの上のそれ以上の師僧の胸の内は理解できません。

再三お断りするも師僧は、

「心配せんでも良い。みんなが手伝ってくれる」と。

皆などとは法兄のことである。当時三宝院には高校生や大学生など十四五人が居住していましたが、その誰もが私より年長者である。

師僧の思いのほどは窺いしれませんが、押し切られて執事に。十六才の世間知らずの執事の誕生である。そんなことで背伸びをすることもなく、身の丈の元気さだけ

が取り柄で、ともかく無我夢中で頑張ったことだけは間違いない。

その当時、高野山の五十余の宿坊はどの寺も春には末寺の団参や講組織の団参。夏には林間学校があり、会社などの夏季研修会が開催されていました。

三宝院でも各地の三宝講の団参や、縁ある寺院の団参や、旅行社主催の団体客も少なくはありませんでした。

夏の始めには大阪近辺の学校の林間学校が連日のようにあり、それが終わると大阪高裁の研修会、そして東京の司法研修所の司法修習生の研修会が数日の日程で数回繰り返し行われていました。

その研修会には講師として判事、検事、弁護士が入れ替わり来山されていきました。今思い出しても神経を擦り減らしながらも何とかやり繰りしていたことに我ながら感心します。

それを繰り返すこと三度、可もなく不可もない三年であれば上出来であったといえますが、とてもそのような評価はできませんが、師僧は予期しないことを口にされたのです。

それはご自坊である鎌倉の青蓮寺の檀務を務めてくれないかというものでした。要するに住職の留守寺を任せられたということである。

どのようなお寺なのか全く知らないことでもあり、高野山のお寺とは異なる地方寺院のそれは護持に苦勞している父の姿を知るのみでしたから、これまた不安なことでしたが師僧の懇願を断れる立場ではなく、鎌倉へ。昭和三十六年一月二十一日初大師の日でした。

青蓮寺は末寺が十数ヶ寺もある中本寺で、初大師には大般若経転読祈祷。四月二十一日正御影供には毎年稚児行列もある大法要がとめられていたのです。また、夏のお施餓鬼は末寺の施餓鬼の日取りが決まっています。

それにお参りし、その最後に末寺院が参列してお施餓鬼がつとめられていました。

こうした年中行事を執行するためには檀家さんの他に縁綱講、お花講など幾つもの講が組織されていました。正月にはその講元に挨拶にまいりました。それは総て東京で、電車、地下鉄、都電などを乗り継いで新橋、神田、浅草、千住などをかけまわりました。田舎者には大都会の人込みは恐怖でもありませんでした。

何もかもが高野山とは違うお寺での生活は驚きの連続でしたが、檀家さんには我が子のように見守られ、各末寺の住職方には、草繫師の弟子というだけで高野山では学べなかった僧侶としての常識を折々に指導していただいたことでした。

葬儀や年回忌など地方寺院の檀務も経験させていただきました。大般若経転読の大音声に僧侶として覚醒させて頂いたようにも思っています。

高野山や鎌倉での様々な経験を自坊で生かしたいと昭和四十年一月青蓮寺を辞去。龍門寺に帰山。

この年は高野山御開創千五十年ということで、当山でも団参。住職と共に私も参加。四年振りの高野山でしたが、奥之院弘法大師御廟前の灯笼堂が法会を記念して建て替えられており、廟辺は面目を新にしていました。三宝院も法縁のある寺院住職が寺務所に陣取られ多くの参拝者に対応しておられ安心したことでした。

ところが、師僧は「吉岡君はこのままここに残ってくれ」と。法会期間中は手伝いに参じられた住職方は法会が結願すれば自坊に帰山されるとのこと。



例によって師僧の懇願は唐突である。これには父も驚きながらも、信者さんとバスに乗り下山。

勝手を知る三宝院でしたが、大袈裟に言えば自坊での人生設計が狂うことになるのですが、非力な私を三度まで頼りにして頂いたことは言葉では表せない大きな喜びでした。

高野山真言宗宗務総長の任にあられ多忙を極められ、全国を駆け巡られて留守がちな寺を護るという責任感で押しつぶされそうなこともありましたが、それに抗する若さがありました。

その頃、世界平和を奥之院弘法大師の御廟で祈られての「和」字百万枚の揮毫を自坊にあるときは、寺内の学生を手伝わせて時を慳んで続けられていました。

ところが、健康そのもののように思えた師僧が昭和四十四年十月四日に急逝されたのです。肉親ではありませんが身体中から力が抜けていったことを今に覚えていません。

その葬儀のお手伝いもし、墓地までの葬列では位牌持ちという役を仰せつけられ、死別の辛さは格別のものでした。満中陰までの日々は毎日奥様(草繫光子)と墓詣は欠かしませんでした。

その奥様と翌年(昭和四十五年三月)の始め、積雪を踏みしめ未だ明けやらぬ女人堂から高野山駅まで歩いてお四国遍路にかけたのでした。師の冥福を願うてのことであることは言うまでもありません。

徒歩遍路のつもりが早くも阿波の途中からバスに乗り、時にはお接待の巡拝の車などにも乗せて頂き遍路を結願。それでも三十余日を数えます。その足で京都の三弘法

(東寺・仁和寺・神光院)にもお参りさせて頂いてそのまま岩国に帰山。高野山と鎌倉での十三年間は僧侶としての姿勢を教え込まれた有難い歲月であった。

四卷奉納 岩国市装束町四丁目 福島 松代殿
 二卷奉納 岩国市南岩国町二丁目 沖本あつ子殿
 一卷奉納 岩国市通津 吉岡 律子殿
 (二月十一日〜三月十日奉納分)



佛教説話

五七六

凶長者夫婦、塔を造作して生天す

舍衛国に長者の夫婦がありました。彼の夫婦は仏陀の信厚く塔や僧坊を造作して功徳を積んでいました。

その長者は後に病を得て命終して天に生まれました。

その妻は夫を追慕憶念して愁憂苦惱していましたが、夫を追念するが故に毎日長者が造作した塔や僧坊を、夫が生前していたことと同様のことを為して護っていました。

天上に生まれた夫は、塔や僧坊

を造作した功徳で天に生まれ

たことを察し歓喜して、現

在その塔などが誰によつ

て守られているか、天眼を

もつて見ました。すると、遺

せし妻が自分がしていたように塔

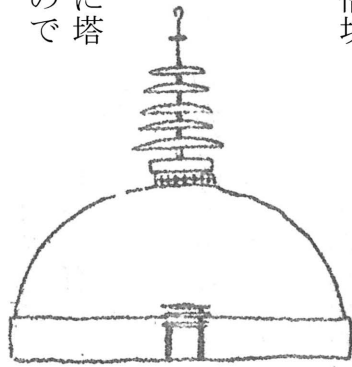
など修治していることを知るので

した。

夫は驚き喜んで妻のもとに下つて妻に語りかけるのですが、妻は「いったいあなたは何者ですか」と。

それを聞いて夫は悲しみ諫めて言いました。

「吾は汝の夫なり、塔などを造作した因縁をもつて天上三十三天に生まれることを得たのである。天上より我が



作りし塔や僧坊がどのような状態にあるか案じて見るに、汝が日夜に修治するを見る。嬉しくなつて今こうして汝のもとに天より下つて来たのである」と。

妻はそれを聞いて言いました。

「それならば以前のように共に暮らしましょう」と。

夫は言いました。

「人身は天人より見れば臭穢して近付くことはできない」と。

そんなことは信じられないことだと訝る妻に言いました。

「再び以前のように我が妻となりたければ、仏と比丘僧を招じて施食供養をするがよい。その功徳で汝は命終の後天上界に生まれるであろう。その時、汝を妻と為さんと。」

妻は天人の言うことを実行してその後、望み通り命終して天上界に生まれることが叶い、夫婦となることが出来たのでした。

そこで夫婦揃つて天より下り仏のもとに至りました。

仏は夫婦の為に法を説かれました。夫婦はそれを聞いて修行して須陀洹果(小乗の悟り)を得たのでした。

もろもろの比丘衆は夫婦が仏の法を聞いて時を経ることなく悟りを得たことに驚き、どのような業縁によつて命終して天に生じ、また下天して小乗の果をえることができたのか、尋ねるのでした。

仏は告げ給いました。

「彼の夫婦、昔人中にありて塔・僧坊を造作して仏と僧に供養せり。

その功徳によるなり」と。

(雑宝藏経卷第三・58)



あとがき

岩国市も広く中国山地と違い瀬戸内の海沿いの通津は温暖で、過ぎし冬も積雪をみませんでした。それでも境内の梅の開花は遅く三月半ばでした。幼木のせいでしょうか。

春まだ浅き岩手県大船渡の山林火災は各地からかけつけた消防士や自衛隊も加わっての消火活動も効を奏さず延焼を続けていましたが、一週間を経て降雨により漸く鎮火しました。

山林火災と云えば米国ロサンゼルス近郷の火災が知られますが、科学文明のすすんだ今日効率化した消火法はないものかと思はないではありません。

秋吉台の山焼きが雨天で何度も延期されていることと考えあわせ、自然界は思うにまかせないことを知ります。各学校の入学試験の季節も終わり、桜咲く春は新入生・新入社員の若々しい澁刺とした姿を目にする季節は、老者も元気をもらえます。

こうした若者の将来が平和で希望に満ちたものであることを願わないではおられません。戦争のない戦後八十年を生き抜いてきた者の偽らざる願いである。

この寺報も小さなプリンターでの印刷となり、体裁も以前とは少し変わりましたが、今しばらくはこの体を維持します。

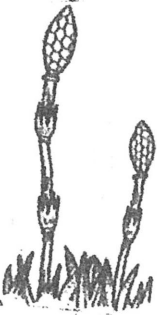
発行者

高野山真言宗

宝池山 龍

門 寺

吉岡 光 昭



天上天下 唯我独尊 …卯月八日はおシャカさま御誕生の聖日…

誰もが
佛性を懐く
尊い存在である



岩国市通津3634-3 ☎740-0044

高野山真言宗

宝池山 龍 門 寺 発行

☎0827-38-4611番